大神氏の始祖惟基を“あかがりの大弥太”ということについて

大分大学名誉教授
九州東海大学教授
富　来　隆
（大分市・志手）

つつしんでこの論考を、いまは亡き羽柴　弘氏にささげる。

昨年の正月と二月とに、羽柴さんからお招きの電話をいただきながら、体調の良くないため延ばしてくださるようお願いした。気管支拡張症の持病のため、とくに寒さには弱く、前もっての約束には全く自信がもてないからである。

まさか羽柴さんが亡くなられるとは思いもかけなかったことで、今更ながら悔まれるが、とは言ってもやはり前もっての「出かける日時の約束」は無理のようである。

謹んで御冥福を祈るとともに、心にあたためている思いを一文として、御霊前に捧げます。羽柴さんもきっと、諒としていただけると思います。

一、

佐伯ノ是基。かの承平・天慶の乱は、坂東での平ノ将門と、瀬戸内は伊豫の藤原ノ純友とがおこした天下の乱であった。その海賊大将純友の次将が、豊後の佐伯ノ是基である。

この佐伯ノ是基が、じつは大神氏の始祖である惟基のモデルなのではないか、という思いがふかく私をとらえてはなさないのである――モデルであって、実際の系譜上のことだと言うのではない――。

もうずい分と以前のこと、二十数年にもなろうか、佐伯のあちこちを官　義雄先生に案内していただいて、歩きまわったことがある。そのときに「潜龍」の墓を教えられた。その印象が今に脳裡にこびりついて離れない。「潜龍」とは、佐伯ノ是基を祀ってのことではないのか。この思いが、私にこの一文を書かせるにいたったのだと

も言える。が、いまはしばらく之を措こう。

時はくだって、源平の争覇のころ、豊後に一世の梟雄緒方ノ惟栄（維義）の活躍がみられた。祖母岳の大明神（竜蛇神）の申し子なる大神ノ惟基を始祖とした五代の孫であり、いち早く反平家の旗をひるがえした。遠く太宰府にせまり、あるいは宇佐を撃つなど、その活動ぶりには目を見張らせるものがあった。

『源平盛衰記』には緒方（尾形）の姓の謂われとして「後ニ身ニ蛇ノ尾ノ形ト鱗ノ有リ」たるためだといい、三鱗の旗印をかかげるのである。この彼の勇強ぶりは、始祖大神ノ惟基のあとをつぐべき器とされたが、その実は、惟基こそは惟栄その人の映像であり、そしてかの佐伯ノ是基をモデルとして作り上げられたカリスマ像なのにちがいあるまい。

――ここに〝カリスマ〟とはマックス・ウェーバーによって、超人的英雄、神託的予言者の謂であり、一つの理想型と理解してほしい（後述）――。

近著、渡辺澄夫教授の『緒方三郎惟栄』を読んで、ますますこの感を深くしている。ところで、本稿では、表題にかかげたように、大神ノ惟基をなぜ〝あかがりの大弥太〟とよぶのか、その意味あいはどうなのか、ということに注目して論じようとするので、大神氏の出自、その系譜上の問題などについては深入りしないでおく。そろそろ本論に入ろう。

二、

緒方ノ惟栄（維義）の活動を通して、その始祖である大神ノ惟基のことが『平家物語』および『源平盛衰記』に詳述されている。彼は祖母岳の大明神（竜蛇神）の申し子なのである。

ところで緒方ノ惟栄の挙兵に関して、一つの興味あることが分る。『吾妻鏡』の治承五年（養和元年一一八一）のこととして、

「二月廿九日、於鎮西有兵革。是肥後国住人菊池九郎隆直、豊後国住人緒方三郎惟能等、反平家之故也。同意隆直之輩、木原次郎盛実法師、南郷大宮司惟安。相具惟能者、大野六郎家基、高田次郎隆澄等也。」

とあり、治承五（養和元）年の二月廿九日に、緒方ノ惟栄らの反平家の旗上げの次第が記されている――さいご

の「高田ノ隆澄」について、これを題として「大分市の文化財、第九集（昭四三、三）に詳述したことがある――。

ところが、これと時期を同じくして、伊豫の河野ノ通清の挙兵のことが見えるのである。同じく『吾妻鏡』の治承五年、

「閏二月二十二日戊午、伊豫国住人河野四郎越智通清為反平家、率軍兵、押領当国之由」

とあり、そして『源平盛衰記』には「同十七日、伊豫国より飛脚ありて六波羅に著、披状云、当国の住人河野介通清、去年の冬の比より謀叛を発て、道前・道後の境、高縄の城に引籠る」と記されている。

ここで河野ノ通清のことを持ちだしたのは、他でもない。彼の旗上げが、豊後の緒方氏らと殆んど時を同じくしていること。九州と四国とで呼応しあい、平家方を驚かすとともに、源氏方からすこぶる頼りにされたこと。そして何よりも面白いのは、惟栄が祖母岳明神（竜蛇神）の五代の孫であるのに対して、通清は大三島明神（これも竜蛇神）の実の子とされていること、――また両人とも、身体に鱗の形が見えること――である。

何を言おうとしているのか、すでに御賢察いただけたと思う。そうである。私たちが緒方ノ惟栄や、その竜蛇神のこと、系譜のこと等々を追求していくうえに、伊豫の河野氏のこの類同性は無視することが出来ない、のである。緒方惟栄ら大神氏一族のことを調べるときに、いつも河野氏のことを念頭におき、これと比較・参考にしなければならない、ということである。

古代海人衆よりの強い伝統。それがセト内を主とする海部族たちに見られる。日本の神話・伝承との近似性は、それが神話・古伝承の単純な模倣とするよりは、海人衆における伝統・同質性と考えたほうが、より相応しいのではなかろうか。

その点から言っても、例えば豊後・大分を本貫とする「百合若大臣」の物語を、一方では河野氏の遠祖益躬をモデルとしたものだと伝えることにも注目して、金関丈夫博士は、「この海上部族こそが、海神住吉をまつる宇佐に関係の深い、神武・武内・百合若の話、その他、伊豫の河野氏の家乗にのこるさまざまの同型説話の断片を保存した伝承者であったろう。」（『木馬と石牛』）と述べている。豊後の佐伯（いまの南海部郡域）の地が、神武の伝承に充満していることを考えれば、金関博士の言

の首肯されることに多言は要るまい。私もまた、この考え方に全面的にしたがいたい。

かくて、緒方ノ惟栄を通して、その神秘性を論ずるばあい、河野氏のことを考えないですますわけには行かない。少くとも三島明神（竜蛇神）の申し子であるとする話だけには触れておく必要があろう。簡単に紹介しておきたい。

河野氏の家乗『豫章記』（群書類従本）によると、河野ノ通清は「此人三島明神（大山祇神）実子也」と記され、「背骨高而三麟凝膚也」（額と両脇とに鱗があった）といわれる。緒方ノ惟栄が「後に身（お尻）に蛇の尾の形と麟があった」（だから尾形と称した）とするのと、極めてよく似かよっている。

河野ノ通清の両親には永らく子供がなかった。その父を親清、母は大山殿と言い、十余年の結婚生活にもかかわらず子供がなかった。子宝を授かりたいと念じて渡島し、大三島明神の前に参籠。かくて第六日目の夜半に「長さ十六丈余りの大蛇、御枕下に寄り臥すと、夢の中に思し召して懐妊あり。」こうして生れたのが通清であった。だから通清は、まさしく「三島明神の実子」（竜蛇神の申し子）なのである。

河野氏と大神氏とが、それぞれ竜蛇神婚譚をもつのは、古代海人族の伝統をつよく持っているからであるが、なお両者のあいだに似かよった点がある。たとえば、河野氏は通清より以後において、その名に「通」の一字を用いることになり、大神氏は惟基より以後「惟」の一字を用いることになったとされる。そして両者とも、（通清および惟基）以前の系譜には幾通りもあって、その出自はいずれとも定かでない、という点も似かよっている。

このような類似点をもつ河野氏と大神（緒方）氏とである、ということを念頭において考えをすすめるべきことは、も早や誰の目にも明らかである。決して郷土のひいき目に偏ることのないように、十二分に心がけなければならない、と私自身にも言いきかせながら、いよいよ本論に入っていきたい。

（つづく）